



唐土勝景図巻を見る

影山, 純夫

(Citation)

日本文化論年報, 26:1-13

(Issue Date)

2023-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100481678>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100481678>



唐土勝景図巻を見る

唐土勝景図巻（京都国立博物館蔵）と呼ばれる、古い中国の景色を描いた図巻があります（図1）。明に渡った雪舟（一四二〇～一五〇六）が帰国のために北京から寧波に戻る途中の景色を描いたとされています。ほぼ同じ図柄を共有する唐山勝景画稿（ボストン美術館蔵）や揚子江図巻（フリア美術館蔵）もあり、唐土勝景図巻と唐山勝景画稿については雪舟筆と伝えられ、揚子江図巻については秋月筆と伝えられています。この作品を見ながら、持つ問題や価値について考えてみたいと思います。

まず筆者の問題ですが、多くの雪舟研究者の間においては三点とも雪舟の真筆ではなく模本と考えられてきました。熊谷宣夫さんは「現在雪舟の真蹟と思われる遺品は知られていない」（『雪舟等楊』東京大学出版会 一九五八年）としながらも「おそらく雪舟原本があったと思われるに十分である」（前掲書）とも書いています。ほぼこのように考えられてきたのですが、近年唐土勝景図巻は雪舟筆

と考えてよいのではないかと
いう考えも述べられるようになってきました。荏開津通彦さんは「あるいは唐土勝景図巻つまり京博本を雪舟真筆とすることさえもかんがえられなくはない」（『雪舟の中国真景画卷群について』『天開圖書』創刊号 山口県立美術館 一九九七年）とし、救仁郷秀明さんは「もしや雪舟真筆ではと思わせる作品である」（『雪舟展図録』東京国立博物館 二〇〇二年）と書いています。二人とも断定するまではいかなかったのは、断定するにはどこかひっかかると



影山純夫

図1 唐土勝景図巻巻頭部分

ころがあるからなのかもしれません。

では真筆でなく模本としても、早くから雪舟筆とされてきた理由はなになのでしょう。作品の中に雪舟という署名も雪舟の印もありません。とすれば描法や関連資料から考えるしかないのです。唐土勝景図巻の箱蓋には「雪舟渡唐之記」とあり、江戸時代後期の模本である「唐山勝景画稿」（東北大学付属図書館蔵）の末に「雪舟筆唐山勝景画稿」とあるからでしょうか。いいえ箱書きや後の伝来などはそれほど信頼できるものではありません。では、どこに理由を求めてきたのでしょうか。

雪舟が入明してたどった道程を描いているのも一つの理由になるでしょう。それ以外にはどうでしょうか。荏開津通彦さんは同じ文章の中で、「図様を短縮・整理して再構成する技術、また京博本に見られる確かな筆致という要素も、雪舟その人によるものと考えることによって納得しうる」と書いており、救仁郷秀明さんは「天橋立図」同様に不規則な紙継ぎもあり、描写はスケッチ風の特徴をよくとどめたところ」（前掲書）が雪舟真筆を思わせる理由と書いています。

この作品と天橋立図との関連については他の研究者もふ

れています。蓮実重康さんは「晩年の最大の傑作『天橋立真景図』——これも写実的な画稿であったと考えられるのであるが——には自由奔放な情熱があつた大きな画面に向かつて一気呵成にほと走り出たような特色と、真実が見いだされるが、この『揚子江図巻』にはそれへの萌芽らしいものがほのかに見出される」（『雪舟等楊新論』朝日出版社

一九七七年）と書いていますし、中村溪男さんは「この（唐土勝景図巻——筆者注）ような大観的な構図や、自由な描線によつて描かれたものは雪舟のよくするところで、晩年鳥瞰的な『天橋立』の作製に見られるような修練は、入明時にすでに行われていたことが知られる」（『雪舟』日本美術絵画全集四 集英社 一九七六年）と書いています。この作品と天橋立図は、自らの見聞にもとづいて景色を描いたとされる点で共通性があり、描法にも共通するところがあります。ですから天橋立図を持ち出してこの作品の雪舟的なものを指摘するのは間違ひではないと思います。しかしこの作品の筆者を雪舟と断定するには問題が残ります。島や岩に加えられた墨面は勢いがないかにも塗りましたというように感じられます。渡明時に描いたとされる四季山水図（東京国立博物館蔵）の筆や刷毛の使い方とは差

がありすぎるようです。また図中の墨書も雪舟の書に似るところはありますが、微妙に異なっています。筆者が比較した雪舟の書は天橋立図や宗淵への手紙から選んだ書で、共に晩年の書なので、この作品が五十歳代の作品とすると、書風が変わった可能性も考えるべきなのかもしれません。しかし残念なことに雪舟の書として現在見ることの出来るのはこの二点だけですので、これらとの比較によるしかありません。以上のことから筆者は図巻は雪舟筆唐土勝景図巻の模本であると考えます。なお唐山勝景図稿は描き方も粗く江戸時代の模作と考えられていますし、揚子江図巻は雪舟ではなく雪舟の弟子である秋月（？）が描いたと伝えられてきました。この揚子江図巻については後に改めて考えてみたいと思います。筆者について長くなりすぎました。ではこの作品を見ていきたいと思えます。

この作品は画卷ですので、いっぺんに全部を見ることは難しく、少しづつ左へ左へと見ていきます。まず水面と遠山に始まり金山寺が姿を現します。その上方には「自北京四十日至此処南京者自此処船路一日、半也」という墨書があります（図1）。

金山寺は、現在の江蘇省鎮江市にあり、今は陸地になっていますが昔は揚子江に浮かぶ島であつた所に建つ寺です。ですから北京から鎮江まで船旅で四十日ほどかかり、南京までは一日半で行くことが出来ると書いているのです。他の文献から見てもこの日程はほぼ正しいとされています。問題はなぜこんなことを書いているのかです。自らの憶えのためと考えられなくてもいいのですが、この画卷を見た人に、金山寺の位置をわかってもらうためと考える方がよいのではないのでしょうか。

この揚子江以南の江南の地は風光明媚な地であり、そのことは日本にも詩文を通じて知られていたでしょうし、中国の五山に数えられるほどの大寺はほとんどが江南にあり、禅僧である雪舟にとっても心引かれる地であつたはずです。この作品が揚子江中に位置する金山寺から始まるのも、理由のないことではないように思えます。

島尾新さんは「雪舟は大内氏に命ぜられて遣明使に随行し（もちろん本人も行きたがっていたが）、当主・政弘をはじめとする山口の武家や禅僧らに彼の地の情報をヴィジュアルに報告する任を負っていた」（『イマージュのなかの江南——雪舟が描いた金山寺を中心に——』『中国・社会と

文化』二三号 東大中国学会 二〇〇八年」と書いています。雪舟の主たる任務はこの報告とは筆者は思っていないかもしれませんが、このような報告も期待されていたことも事実ではないかと思います。この報告が任務であつたとすれば、江南以北の景色や明の都である北京の景色も描くことは求められていたはずで、いまのところそのような作品の存在を考えさせる絵画や文書は知られておらず、雪舟が描き残したかったのは江南の景色であつたと考えてよいのではないのでしょうか。そんなことを先の墨書は感じさせるのです。

さて金山寺です。本来の寺号は龍游寺で、作品中にも金山龍游寺との墨書があります（図1）。東晋時代（三一七～四二〇）の創建と伝えられる古寺で、現在は江天禪寺と呼ばれています。雪舟は当然この寺を船上から見、また鎮江滞在中に参詣もしているはずで、後年雪舟は金山寺図を描き、交友のあつた僧に金山寺の一つ一つをさして説明をしています。いうことでこの作品の金山寺は雪舟が見たままを描いたように思えますが、当時存在しなかった塔が描かれている（二塔の内の一塔は存在した）など、けっしてそうではないのです。船の上で寺の全景を細かく写しとることはできなかったでしょうし、境内で全景をつかむ

ことも難しかったでしょう。やはりすでに指摘されているように実際に見た景色と絵図や古画による情報を統合したものとして考えるべきなのです。なお金山寺は揚子江の主流からの景観を描いており、北からの景観ということになるはずですが、南からの景観を描いたという説がたてられたこともありました。しかしその説は否定されています。現在の景観から考えてもそれには無理があります。

金山寺の横には、屹立する岩が描かれており、郭朴塚との墨書があります。郭朴は東晋の学者で詩人でありまた占トを得意としたとされる郭璞（二七六～三三四）のことと考えられますが、揚子江の中にあつた彼の塚と伝えられるものを描いているのです。この塚については、雪舟とともに明に渡った中心忠という人物が詩に詠んでいるところをみると、使節団の中で話題になっていたのでしょうか。筆者が以前鎮江を訪れたとき案内された塚が郭朴塚で間違いが無いとすれば、図上では金山寺のほぼ前に金山寺と重なるように描く必要があつたと思いますが、それを避けるために金山寺の横に描いたのかもしれない。雪舟が目にした絵図によって金山寺の横に描いた可能性もあるでしょう。郭朴塚については問題が残ったままです。参考のため筆者

の写した郭朴塚の写真を載せておきます（図2）。



郭朴塚の上方には遠くの山の連なりが描かれています。その中の両耳の立ったような姿の山は雪舟がよく描く山で、こ

の図巻の後にも出てきますし、館蔵）や四季山水図巻（京都国立博物館蔵）などにも見出すことが出来ます（図3）。その山の連なりが終わるところには不思議な景色が描かれています。本来空が表現されるべき所に高く山が描かれているのです。二つの景色が重なっているのです。これは異なる場面をつなぎ展開させるときに雪舟がよく使う描き方で、やはり四季山水図巻（毛利博



図3 四季山水図（京博）部分

物館蔵）などでも使っています（図4）。陸から遠かった視点が近くに変わっています。しかし描かれた建物の大きさが変わらないのは、画面の連続性を感じさせるためでしょう。

画面は鎮江の市街へと続きます。面白いのは郭朴塚の少し後の河岸から門の方へ



図4 四季山水図（毛利博）部分

道（棧橋かもしれません）が描かれていることで、あるいは金山寺への船着き場へ続いているのではないかと思わせたりします。近辺に何艘かの船が描かれているのもそう思わせる理由です。家並みが終わる所にも道と思われるものが描かれています（白く塗り残され墨点をおいています）。とても河中からだと思えないはずですし、かなり上方からでないと思えないと思いますが、あえて描いているのは、雪舟自身が歩き印象深かったということなのでしょう。画面の連続性を感じさせるためでもあったのかもしれませんが、ちょっと説明的過ぎるように感じられます。

市街に近づくにつれ家は増え、船も多くなります。本當に多くの家や楼閣が描かれています。家並みが続くことを表すためでしょう。やがて城壁が現れます。城壁で囲まれたところが鎮江の中心で、鎮江府即潤州府との墨書があります(図5)。潤州は潤州の間違いで、鎮江は古くは潤州と名付けられていたのですが、北宋時代(九六〇～一一二七)に鎮江府に改められたことです。当時は鎮江府であつたのに、雪舟はなぜこのように書いたのでしょうか。中国の古典を学び、潤州についての知識を持つ人達に鎮江を知らしめるためであつたのでしょうか。城壁は一郭を取り囲むように描かれています。また何カ所にも旗がたてられているように描かれています。かなり印象深い光景だったのでしょう。

壁内の一つの峰の上にいくつかの楼閣らしき物が描かれ、北固山との墨

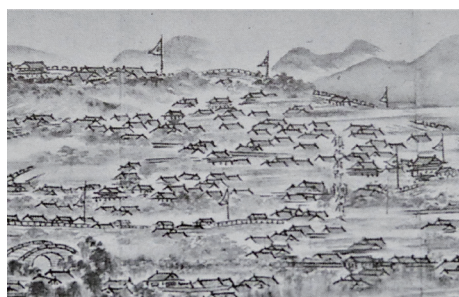


図5 唐土勝景図巻鎮江部分

書があります。北固山は標高五〇メートルほどの山です。墨書からは壁内の峰だけを北固山としているように見えますが、今は甘露寺の建つ峰を含めて三つの嶺を北固山と考へなければいけないようです。北固山の山裾にも道が描かれていて、これを進めば甘露寺と東方の城門にたどり着けそうです。雪舟は道を描くことを好んだように思えます。

甘露寺は三国時代(二二〇～二六五)に創建されており、『三国志』によれば蜀の劉備が呉の孫権の妹孫尚香と結婚した場所とされ、孫尚香が化粧をしたという多景楼もあります。多景楼については中国の詩人にも詠われていますし、日本の五山僧絶海中津による詩もあります。使節団の中で話題にならなかったとは考えられません。図巻には多景楼や五重塔も描かれています。五重塔は現存する宋時代の鉄塔を描いたのかもしれませんが。

次に切り立った岩肌の峰が描かれています。これは焦山の川向こうにある象山と思われます。その横には焦山が揚子江中に横たわるように描かれています。焦山寺という墨書もあります。焦山寺は現在の定慧寺のことで、後漢時代(二五～二二〇)に創建された古寺です。雪舟たちが訪れた時は焦山寺と呼ばれていたようです。焦山は古くか

ら文人墨客の訪れるところで、山中の岩には多くの詩文が刻まれています。宋時代の書家で画家また文学者であった米芾（一〇五一―一一〇七）の額や詩人で政治家であった蘇東坡（一〇三六―一一〇一）の碑もあるので、使節団にとっては必ず訪れたい場所であったはずです。

象山の上方には遠景の上に遠景を重ねる巻頭で見た景色の重なりが見られます。雪舟が画面の展開を意識したと考ええると、象山と焦山は違う景色の中に描かれていると考えなければならぬのですが、象山と焦山はそれほど遠くないのでこれには無理があります。雪舟はこれをどのように考え描いたのでしょうか。

焦山に続けて少し揚子江が描かれ、画面は呉江の景色に変わります。これまでが鎮江の景色で、遠方から金山寺、鎮江の市街、北固山、焦山といった主要な景色へ移り再び遠方へといった視線で纏められており、焦山の横の揚子江中流也という墨書も自北京四十日云々といった墨書に対応しているようにも思えます。

続いて呉江の景色が描かれています。唐突にしかも城壁内の市街の途中からというおかしな始まり方です。これより前にも市街を描いたものがあったと考えるべき

でしょう。呉江は蘇州の南に位置し湖沼の多い地域です。市街が終わると大河と架かる石橋が描かれています。石橋の中ほどには亭が描かれその上には道士観也という墨書があります。この橋については荏開津通彦さんが垂虹橋で、道士観は垂虹亭ではないかという説をたてています（前掲論文）。雪舟の少し後の禅僧策彦周良は二度入明し記録を残しており、そこには垂虹橋の中ほどに亭があり、七二の梁があるために俗には七二橋と呼ばれていたと書かれています。この梁は橋が木造であった時代のことだったのかもしれない。

さらに進めば家並みが続き五重塔が現れます。そこには接待寺という墨書があります。接待寺は宋時代に創建された寺で呉江県東門外にあったとのことですので位置的には問題がないのですが、描かれた塔が接待寺のものであったことには荏開津通彦さんは疑問を持っています。

接待寺を過ぎるとまた石橋が現れます。垂虹橋とされる橋よりかなり大きな橋として描かれています。橋脚を高くして橋が通りやすくしたところも描かれており、この描き分けは雪舟の実見によるのでしょうか。この橋も突然途切れますが、しかしこれに続く景色も描かれていたはずで

す。

その後も不自然な家宅の表現で始まります。やはりこれより前にも絵はあったはずで、どこかの市街が描かれていたとしてもおかしくはないのです。次に長々と描かれているのは宝帯橋です（図6）。宝帯橋は蘇州の東南に現存する石橋で、唐時代に蘇州を治めた役人（王仲舒ではないかといわれています）が、自分の玉帯を売りその金で作ったために、宝帯橋と名付けられたと伝えられています。

中央に一カ所だけ橋脚をアーチ状に高くしたところがあり、他の低い橋脚もアーチ形となっていて、全部で五三を数えます。橋の上には船を曳く人々や、荷を担ぐ人々が、また五重塔や坐る犬らしきもの、さらには簡単な枠状のものが描かれています。宝帯橋という墨書もあります。現存の橋にも五三のアーチと石造の五重塔と石造の獅子がある

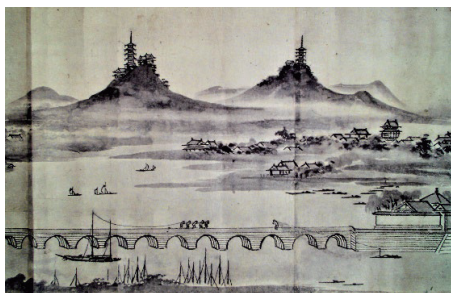


図6 唐土勝景図巻宝帯橋部分

ので、雪舟も見えていたしこの上を歩いたと考えてよいでしょう。画面は宝帯橋の南端をぼかすことで終わっています。

この画面で気になることが二つあります。一つは前半に描かれている五重塔のある二つの高峰と、中ほどの大湖という墨書です。蘇州には双塔や雲岩寺塔などの古くて有名な塔はありますが、方角から見ても当てはまりそうにありません。だいたい蘇州にこのような高峰は存在するのでしょうか。塔のある二つの高峰と水面、それに長い石橋という組み合わせは、雪舟の弟子秋月の描いたとされる西湖図をつい思い出してしまいます。大湖の墨書ですが、墨書はその場の説明として書かれていたはずで、とすれば画面上方には大湖（太湖のことだと思われます）を描いているのでしょうか。奥へと続く運河は太湖へと続くのですが、墨書がやや高く書かれていることからすると、この先には太湖があると示すために書いたと考えてよいでしょう。

唐土勝景図巻は宝帯橋で終わります。この一卷は鎮江、呉江、宝帯橋の三つの景色から構成されていました。鎮江の部分は少し最後が切れているのかもしれませんが、一応のまとまりがあります。呉江の部分は最初と最後がなくな

つていると考えられます。宝帯橋の部分は最初がないと考えられます。ということは雪舟ではない誰かが一卷につなぎ合わせた可能性が高いことでしょう。鎮江の次に呉江を持つてきたのも遣明使節の旅程をよく知らなかったからでしょう。なぜなら宝帯橋は呉江の北の蘇州にあり、帰路では先に訪れる場所だからです。三点の独立した作品があつたが一部損失した後に一卷として纏めた、その時に呉江部分を宝帯橋の部分の前に繋ぐという事も起こつたと考えておきます。

唐山勝景画稿には、鎮江、呉江、宝帯橋以外に、定海、紹興、寧波の城壁に囲まれた市街が描かれています。城壁内に多くの家や楼閣が描かれているのは、鎮江と同じです。唐土勝景図巻では古寺などの名所を描き遠景も加えて楽しめる風景画となっていますが、唐山勝景画稿の定海以降の部分は都市風景の羅列といつてもよいようなものになっています。しかし城壁内市街全体は描いておらず、位置関係を無視して定海と紹興を一本の道で繋ぐといった考えられないような構成で描いているのです。定海と紹興の間に蓬萊駅（前掲論文で荏開津通彦さんは墨書の蓬木駅は蓬萊駅の誤りであろうとしています）のような、重要とも思えない場所が描かれているのも不思議です。寧波のみは独立させて詳しく描きしかも多く墨書を加えているのは、使節団が入明してまず長く滞在することから、重要でよく知られていた都市であつたからなのでしょう。紹興城外の蓬萊駅は使節団の宿泊地なのですが、このような駅が描かれるのは実際に明を旅したという実感を具体的に伝えるためではないかと、荏開津通彦さんは書いています。そうとすれば定海や紹興、それに寧波の城壁内の市街が描かれたことにも納得がいきますが、では他の都市も描かれていたのでしょうか。

秋月筆と伝えられている揚子江図巻（フリア美術館蔵）についても見ておきたいと思います。これは唐土勝景図巻の内の鎮江の部分のみを描いたもので、江戸時代前期の画家狩野安信（一六一四―一六八五）が巻末に秋月筆として間違いが無いとの極めを書いているために、秋月筆とされてきました。熊谷宜夫さんは「秋月筆とはなし得ないがその年代も古く、祖型をよく伝えるものであろう」（前掲書）と書いています。ではなぜ雪舟筆といえないのでしょうか。それは唐土勝景図巻などと比べて墨色も濃く筆使いも荒い

からなのでしよう。やや作品を貶めるような書き方をしましたが、大西廣さんは「何かもっと激しいもの、眼前に動く強い何かに迫られて、思わず筆を走らせたとしてもいいじゃない」（『雪舟史料を読む九』『月刊百科』四七七 平凡社 二〇〇二年）ものを感じています。秋月は雪舟の弟子で、早くてやや荒い筆使いを示す作品が多いとされます。そんなことから秋月筆と考えられたとしても不思議ではありません。しかし秋月筆と決するには問題が残ると思います。

では揚子江図巻を唐土勝景図巻と比較しながら見ていきたいと思います。揚子江図巻では景物をより近く大きく描いているところが大きな違いで、ある迫力を感じさせる一方で、煩雑な感も生んでいるといえるでしょうか。まず遠山と水面が描かれ例の自北京云々の一文が書かれています。この書は墨書ではなく朱書きであるのが不思議です。後の書も朱書きです。金山寺の姿は同じですが、金山寺の向こうに高峰が描かれている点が異なります（図7）。このような高峰は実際には存在せず、このように見えることはありません。しかしこれについて大西廣さんは「このまるで中景とも遠景ともつかぬ、不明瞭きわまりない背後の山影こそは、



図7 揚子江図巻巻頭部分

作者がまずもつては、胸中に用意した、金山の定型に即して描き進めながらも、しかし現に実際には、このような幻影のような山嶺が、寺の向こう、塔の向こうに見えてきたがために、思いもよらず写し取ってしまったものだったのではないだろうか」（『前掲論文』）と書いています。作者が見たままを描いたとされたわけですが、この見方の前提として、揚子江図巻は作者のスケッチに基づく下絵的なものという考えがあるようです。

向こう岸の山々や高台の家並みが終わると多くの家や高樓が描かれるのですが、城壁に囲まれた府内に至るまでの景色が長々と描かれています。紙数でいくと三枚半に描かれています。唐土勝景図巻では二枚に描かれていました。紙幅が違うので単純に比較は出

来ませんが、二倍以上の長さに描かれているとみてよいでしょう。

さて鎮江府内です。府内は城壁によって囲まれているはずで、そうでなければ防御施設としての壁の役割は半減するのです。唐土勝景図巻では府内をぐるりと取り囲むように描かれています。これならば城壁は防御の役割を果たすでしょう。しかし揚子江図巻では城壁は府内を取り囲んでいるようには見えないのです。城壁は逆S字形に描かれ、鎮江府の朱書のある場所を府内とすれば、北向山を含む場所は府外となってしまう。面白いのは揚子江図巻の府内を描いた前半部分の下半分と北向山を含む後半部分の上半分を合わせれば、唐土勝景図稿の府内を描いた部分と極めて近いものができることです。

府内の北向山と甘露寺のある峰は唐土勝景図巻では間近にあるように描かれています。揚子江図巻ではその間に三つの峰が描かれています。これについては大西廣さんは「北向山一帯はこの時期、倭寇の襲来に備えて前峰、中峰、後峰の三つに分割されていたことが知られている」とし「明らかにその中峰をも含む三峰が描き出されている」(前掲論文)と評価しています。これがどんな史料によっ

ているのかはわかりません。それが事実としてこの三つの峰がはたして描かれた三つの峰に当たるのでしょうか。甘露寺と北向山が描かれているほどに離れているということに對して、筆者の現地では納得できないところがあります。北向山の山裾に水面が、そしていく艘もの船が描かれているのもありえないことです。

甘露寺を過ぎると象山さらに焦山寺が描かれています。象山と焦山は非常に遠く描かれています。実際は二つの山の間はそれほど遠くないことは実際に足を踏み入れたことのある人ならばわかることです。唐土勝景図巻の方が実感に近いわけですから、なぜこういう描き方をしたのでしょうか。

焦山寺に続いて高山と樓閣や家並みが描かれています(図8)。鎮江の対岸揚州を描いたとも考えられますが、そんな大

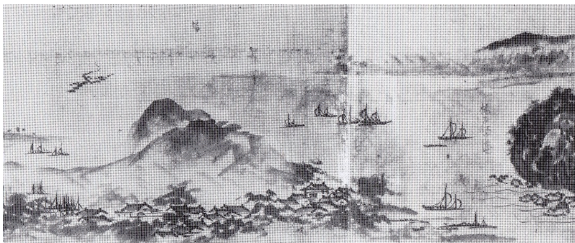


図8 揚子江図巻巻末部分

都市を描いたようにも思えません。飛んでいる雁が描かれており、瀟湘八景の要素を持ち込んでいるようにも思えます。この部分は唐土勝景図巻には無く、唐山勝景画稿にもありません。唐土勝景図巻の鎮江の終わり方にはおかしさを感ぜませんが、あるいはこれに続く部分があつたのかも知れません。

二作品の比較は終わりましたので、その関係についても考えてみたいと思います。これについては大西廣さんが「フリーア本（の原本）が下絵で、京博本（の原本）がそれをもとにした完成作だというのが、大方の見るところであり、簡単にはそういつていいのかもしれない」（前掲論文）と纏めています。フリーア本すなわち揚子江図巻の原本をもとに京博本すなわち唐土勝景図巻の原本が描かれたと考えており、そう考える理由は荏開津通彦さんが「京博本系の図巻は、フリーア本に見られるような図巻を基本的に継承しながら、そのやや冗長ともいえる部分を切り詰め、整理する」という、一定の方針のもとに作り出されているのである」（前掲論文）と書いていることに近いのかもしれませんが。

唐土勝景図巻は、大西廣さんの言葉を借りるならば、山水図巻としてまた名所絵図巻として整理洗練されていると

いうわけです。はたしてそうなのでしょうか。反対に唐土勝景図巻にいろいろと付け加えたのが揚子江図巻であつたとは考えられないでしょうか。この可能性について荏開津通彦さんも先の論文の注でふれてはいますが、冗長な部分の水増しなどが不審として否定しています。

水増しとしてさきに指摘したのが、金山寺の後方の高峰と北向山と甘露寺の間の三峰です。ひよっとすると焦山寺より後の部分も水増しかもしれません。また実際より離れているように描かれているのが、北向山と甘露寺の間と象山と焦山の間です。他にも無理のある表現が何カ所もみられます。最も大きいのは鎮江府の城壁で、すでに指摘したように防御の働きをほとんど果たさないのです。北向山の裾の水面や船もあり得ないところに描かれており、甘露寺の向こうの水面の存在もおかしいのです。以上のように多くの問題をこの揚子江図巻は抱えているといえるでしょう。この問題をなぜ抱えることになったのでしょうか。それは揚子江図巻の作者が、唐土勝景図巻の鎮江の部分をもとに、唐土風景長巻を作ろうとしたからだとするのはまちがいでしょうか。作者は唐土勝景図巻に描かれた景物を生かすことを基本に、画面を引き延ばすために实景に基づか

ない景色を加えるだけでなく、府内の景色のようにもとの一部分画面を二部分画面に分割するようなこともおこない、それによって名所絵図巻というより山水図巻といえるような作品を作り上げることを目指したのではないかと考えるのです。この考えが正しいとすれば、作者は雪舟より後の絵師、それも秋月を含めた雪舟系の絵師の可能性を考えてみたくりますが、手がかりは少なすぎるようです。

原本は雪舟筆と考えることができるにしても、雪舟筆と筆者は考えていない唐土勝景図巻や揚子江図巻について見ってきました。その理由はいくつかの研究者の記述を紹介したように、これらの図巻が天橋立図と関係があり（その関係をどのように見ているかには違いがありますが）、詳しく見ることは天橋立図を見る上でも参考になると考えたからです。このような図巻（の原本）の制作には、日本の絵巻の存在や中国の画巻による絵画作品の存在が影響しているでしょう。中国の画巻作品としては伝李公麟筆蜀山図巻（フリア美術館蔵）や伝李嵩筆西湖図巻（上海博物館蔵）、伝巨然筆長江万里図巻（フリア美術館蔵）などによる影響が、辻惟雄さんや荏開津通彦さんによって指摘されています。

す。もしこのような画巻の制作が四季山水図巻（毛利博物館蔵、京都国立博物館蔵）の制作と繋がっているとすれば、その重要性はきわめて大きくなります。いずれ四季山水図巻（毛利博物館蔵）を見ながら唐土勝景図巻についてもふれてみたいと思っています。

図版出典

唐土勝景図巻（京都国立博物館蔵）……『雪舟』

四季山水図巻（毛利博物館蔵）……『雪舟』
日本美術絵画全集4（集英社刊）

四季山水図巻（京都国立博物館蔵）……『雪舟』
日本美術絵画全集4（集英社刊）

揚子江図巻（フリア美術館蔵）……『天開圖畫』創刊号
（山口県立美術館刊）